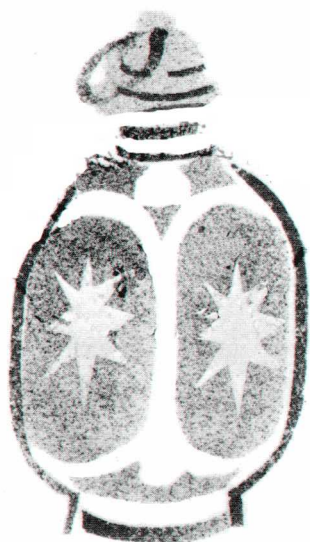


死にたいあなたへ

朝倉和泉



中央公論社

定価八八〇円

死にたいあなたへ

昭和五十六年十月十五日印刷
昭和五十六年十月二十五日発行

著者 朝倉和泉

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二二三四

検印廃止

©一九八一

目次

ある少女からきた手紙

K子さんへの手紙

死にたがる人々　そして私

闇はまだ深く

災厄の一月に

今、かすかに朝の匂い

屋上で出会った少年

——「あとがき」にかえて

追記　Aさんの死

181

161

125

87

49

15

15

5

装
幀／上
西
康
介

死にたいあなたへ

ある少女からきた手紙

『還らぬ息子 泉へ』の母体となったノートを閉じた後、私が落ち込んだ精神的なスランプは、予想外に深かった。ポツカリと穴の開いたような空虚さ。もう私のすることは何も残っていない。悲しむことさえ、できなくなってしまったかのようだった。忘れることができたのだろうか？ いや、そうではない。身体の一部になってしまい、その存在を意識しなくなったただけなのだ。ちやうど胃袋が、調子を狂わせてその存在を主張するとき以外は沈黙しているのと同じように。悲しみばかりか、他の感情もすべてその動きを止めてしまった。何を聞いても、何を見ても無感動。あるのは、呼吸をするのさえシンドイほどの、どうしようもない倦怠感だけ。

それともう一つ、ノートを公開したら何が起るかわからぬといった不安もあった。父はどう思うだろうか。これ以上泉について書いたら……と脅迫めいたことをいった前の夫は、その「脅

し」を実行するだろうか。また、どんな批判の集中攻撃を浴びるだろうか。ええい、面倒くさい。そうになったら死んでやれ。投げ遣りにそう思うと、そんな日がきつとくるような気がしてくる。私は、新しいノートを開き、今度こそ本当の遺書となるべき「日記」をつけ始めたりした。

その少女、K子さんから手紙が届いたのは、『還らぬ息子 泉へ』が単行本として出版された直後の十月半ば、そして私が、そんなスランプからまだ抜け出せず、相変らず死の淵に立って、その底に熱いまなざしを注いでいた時である。当時、私のもとへは、読者から多数の手紙が寄せられていた。その中の一通として、何ら特別な興味を引かれる理由も持たぬまま、私はその手紙に目を通して始めた。

『還らぬ息子 泉へ』を読んで、K子さんは大変に感動していた。「感動しました」といって下さった方は多い。それにしても、K子さんの感動振りはいささか異様とも思えるほどで、それが私の興味を引いた。

「読み終った時には嗚咽をこらえることができませんでした。夜遅く読み始め、夜明け近くに読み終えました。本を抱きしめながら表へ出ました。朝日が昇る前の東の空をじっと見つめて、迫りくるわけのわからない感情にどうしようもなく、ただ泣いていました」

何がそれほどまでにK子さんの心を動かしたのだろうか。彼女は、泉の中に自分の姿を見出したのだ。彼女も校外学習や体育祭が嫌いだった。そのため先生に睨まれて内申が悪くなった。そ

の内申で高校受験を失敗した。何とか定員割れの高校に入りはしたものの、彼女の存在は浮き上り気味。今では部屋に閉じこもり、自己嫌悪のあまり自分を傷つけて憂き晴らしをしている……。そんな彼女だから、事件当時から、泉の遺書に少なからず共鳴する部分を見出していたのだった。だから、マスコミがこの事件を興味本位に取り上げる度に、「何か口惜しくて口惜しくてたまらない気持」だったという。「上層思考」だの、「劣等感の裏返し」だのと簡単にいわないで欲しい。もっと他に理由があつたはずだ。学校の問題はどうか、友達の問題はどうか、彼の心の内にあつたのは何か。

『還らぬ息子 泉へ』を読んで、彼女は、泉の「立場」がやっと説明されたと思った。それは同時に、彼女の立場の釈明がなされたということでもあつた。そのことだったのだ、彼女をそうまで感動させたのは。彼女は、自分の代弁者であるが故に私に心を開き、自分と「本当に驚くほど似ている」故に泉に心を通わせる。

「その人がもう存在しない、そう考えただけでもたまらない……それに、何よりも貴女のお気持です。どれくらい悲しまれ、苦しまれたか——」

読み終えたとき、不覚にも私は涙ぐんでいた。彼女が泉の立場に立ち、その目で母親である私を眺め、その上で私に同情して泣いてくれた——それが何よりもうれしかった。

一人、部屋に閉じこもり、読書にふけり、ラフマニノフに耳を傾けている少女を、私は頭に思

い浮べてみた。すると、突然、不安が頭をもたげた。否応なしに泉が思い出された。きちっと整った文字。礼儀正しく、思い遣りにあふれた、しっかりした文章。頭のよい、感受性の鋭い、濃やかな神経の持主なのであろう。その少女が、今、学校に背を向け、友達に背を向け、人間に背を向けている。危険だ……。

すぐに返事を書くとうとして、私はハタと当惑した。一体何を書いたらいいのか。どういう書き方をしたらいいのか。私はK子さんを知らない。知らない人に安易に言葉をかける危険性は、私が一番よく知っていた。たった一言、善意から発した言葉でさえ、人を深く傷つける可能性はあるのだ。少しでも「建前」の匂いをかぐと拒絶反応を起した泉の気むずかしさを、私は思った。「善意からの」励ましにソッポを向いた、私自身の気むずかしさを思った。泉に似た気むずかしい少女がせっかく私の方を向いてくれたのも、できればこのまま、こっちを向いてもらいたい。さらに、できれば、私の言うことに耳を傾けてもらええる状況を作りたい。それには、彼女の開いた心を閉ざす危険のある「説教」などは口にしないことだ。

頭の中をかけめぐっていた勇気づけの言葉を全部放棄して、私は、自分の近況報告をさり気なく書くに留めることにした。私もあなたと同じ世界の住民なのですよと知らせて連帯感を深めることの方が、立派な説教をするより、はるかに「害がない」と思ったからである。

そこで私は書いた。いまだに薄れぬ悲しみのこと。たくさん励ましの手紙をもらったにもか

わらず対人恐怖症が直らないこと。仕事ができないこと。時には何もかもいやになり、いつ死んでしまいたいと思う時もあること。それから続いて、こんなことを一気に――。

「でも、よくいわれるように、死ぬのは『逃げ』です。現実からの逃避です。これは『建前』のように聞えるけれど、確かに真実だと思う。だから私は、今、生き続けるためにひたすら強くなろうと努力しているのです。強くなること。とにかく強くなること」

ヤッター！ と一瞬思った。説教は書かないなどと言いながら、ちゃんとやっている。しかも、一見してそれとわかる、そのものズバリのいいまわし。まるで道徳の教科書でも読んでいるようじゃないか。消そうか？

しかし、さらに心外なことに、私はそれらの文字を消そうとはしなかったのである。このまぎれもない「説教」は、私の身体のどこからか忽然と吹き出したものであった。意識して作り上げたウソでは決してなかった。しかも、私は、どうしてもそれを書いて、そこに残しておきたかったのだ。

その時、私は自分の中に、もう一人別の私が確かに存在しているのを知った。こんな言葉を、恥も外聞もなく叫ばずにはいられないほど必死な、「生きようとする私」である。少女に送る激励の手紙という大義名分の下に、今までの沈黙を破って彼女が発言したのだ。少女にというよりは、ウジウジした私自身に向って、かくあるべしとの「願望」を叫んだのだ。

この発見は、私にちょっとした希望を持たせた。K子さんを励ますことによって、この私自身も蘇ることができるようではないか。彼女に送る「生きましよう」というメッセージの中に、自分の「生きたい気持」を確認し、本来のしたたかな私自身を取りもどすことができるのではないかと、私は、その一見ウソ臭い、けれども私の心底からの叫びである励ましの言葉を含んだ手紙を、そのまま投函した。K子さんは、この人もこんなありきたちの説教をする人だったのかと失望して、再び心を閉ざしてしまうかもしれない。そして、二度とこっちを向いてくれないかもしれない。しかし、真に言いたいことがいえない手紙など、いくら書いても意味はないのだ。これがダメならそれまでだ。縁がなかったことにして忘れよう。気持が通じて欲しいと祈りつつも、手紙の成果に期待をかけ過ぎることはなかった。

だから、それから二週間ほどしてK子さんから手紙がきたとき、私の興奮ぶりは大変なものであった。何と書いてきたろうか――。手紙を開きながら、通知表を開く小学生のように、私はドキドキしていた。それは、こんな風に始まっていた。

「貴女の手紙を受け取ったその夜、とても不思議な夢を見たのです。暗闇の中、私はたった一人であらずくまっていました。すると突然、一条の光がさし、大きな手が現われたのです。その手は、とても不思議な手でした。まっ白でつやつやしているようにも、ポツチャリとしてざらざらして

いるようにも見えるのです。その手は、私に向ってまっすぐにさしのべられました。その大きな手にすくい上げられるような気がして、ふっと安らいだような気持になって目が醒めました」

目を覚まし、私の手紙と『還らぬ息子 泉へ』を読み返した彼女は、夢の中の手が、ポッチャリした泉のザラついた手と、私の白くつやつやした手が重なってみえたのだと思い当る。「ひどい時は自殺さえ考えていた」彼女は、その夢を見て「現実から逃げてはいけない」との私の言葉に、「死への傾斜は大きくブレーキをかけられてしまった」ことに気がついた――。

読みながら、こみ上げてくるうれしさに、私はまたもや涙ぐんでいた。K子さんが私を受け入れてくれたという喜びの他に、安堵もあった。よかった。想像していたより重症ではないようだ。ずいぶん素直な子じゃないか。

ところが、手紙を読み進んでみると、少しも安心できないことがわかった。家のことも、学校のこと、彼女がなぜそうなっていったかの原因さえも、第一信以上のことは何一つ書かれていない。しかし、彼女が精神的にひどく傷ついていることは、拒食症と不眠症から極度に衰弱し、時には神経科医の診察さえも受けているらしい様子から、十分察せられた。

これは大変だな。自分が、いまだに人から「大変だ」といわれる状態にあることを棚に上げて、私は思った。それにしても、これほど深く心を病んでいる少女が、よくあんなありきたりの説教に感動してくれたものだ。誰にだっていえる言葉だ。彼女とて、何度となく聞かされ続けてきた

言葉であらうに。

その疑問に対する回答を手紙の中に見出したとき、私は正真正銘の衝撃を受け、しびれてしまったのである。

「『現実から逃げてはいけない』、そういつて下さった方は他にもありましたが、貴女もお手紙にお書きになられているように、『建前』としかとれませんでした。でも貴女の場合は違います」
彼女は続ける。ギリギリの線まで追いつめられ、それでも死の誘惑をはね返して強くなろうと努力している私の言葉だから違うのだと。そういう人の言葉だから、それに従って苦しみをできるだけ耐えよう、少くとも、そうするように努力してみようという勇気が湧いてきたのだと。

私は、何か大きな力に身体をゆすぶられているような気がした。私だから人の心を動かすことができた……？ 私の言葉だから信用してもらえた……？ そんなことってあるだろうか。いや、実際にあったのだ。私の言葉に勇気づけられ、かすかな希望の光を見出した人が、確かに、ここに一人いる。私だからできることが、確かに、ここに一つある！

わけのわからぬ熱い感情にせき立てられるように、私は、すぐさま返事を書いた。

「人を信頼したくてもできない。そのお気持、よくわかります。本当に辛いことです。不幸なことです。でも、まだまだ望みはある、そう思ってみませんか？ 大勢の人に接してみれば、その中には一人ぐらい気持の通じる人がいるかもしれない、そう期待してみませんか？ ある日、ふ

いに目の前にその人が立っている、そんな奇跡が起るかもしれない、そんな夢を持ってみませんか？ その時がくるまで、私がその代わりを務めましょう。私の手は、もう白くもなく、つやつやもしていませんが、そんな手でもよかったら、いつでもさし出す用意があります」

K子さんは、もう一人の「泉」であった。SOSを発信している「泉」であった。今からでも遅くない「泉」であった。そんな「泉」を目の前にして、私が何もせず放っておくことができようか。

それに、泉の経験からいって、子供というものが、親には容易に心を開かぬものであることを私は知っていた。子供を誰よりも愛しているのは親である。子供のことを心から考えているのも親である。それなのに、その愛の重さ故にか、子供は親から逃れようとする。親ではダメな場合もあるのだ。親だから、子供を救えないこともあるのだ。泉とて、もし外にしかるべき相談相手を持っていたら、自分の悩みを何もかもブチまけて話せる人を持っていたら、あんなところまでは追いつまなかったらうものを。

私はK子さんにとっての、そういった悩みの捨て所になりたいと思った。「王さまの耳はロバの耳」とミダス王の床屋が叫ぶための穴になりたいと思った。そういう立場に立つことによって、私のさりげない「生きましよう」というメッセージも、徐々に受け入れてもらえるようになるに違いない。

この前、手紙を書いた時に胎動を始めた「生きたい私」は、この新しい「任務」の前に今や完全に生まれ出て、「死にたい私」を押しつけて前面にシャシャリ出ていた。

私も生きよう。そして、K子さんにもしっかり生きてもらおう。何といっても、彼女はまだ高校二年生なのだから。